

図書館だより

190.7

酒井英行 (国文学科・助教授)

漱石 その陰翳

有精堂出版 1990.4.4
請求記号 913.6/N58s

私は『こゝろ』(大3・4~8)という作品を読む時、後味の悪さを覚えずにはいられない。また、「先生」という人物に対して不快感の起こるのを禁じえない。私はどうやら、このような読後感の湧いてくる源の入口に辿り着けたようである。

(本文より)



目	次
漱石文学の女性 酒井英行	2
よんでみませんか	3
リクエストお待ちしております!	5
卒論雑感 濱崎 睦	6
元気にしています 佐藤和子	7
新入職員紹介	
安瀬可奈子	8
お知らせ	8

漱石文学の女性

酒井英行（国文学）

花ならば黄色のフリージア、音楽ならばモーツァルトのピアノ・ソナタ——そんな女性が私は好きである。

漱石文学のなかの女性は、総じて、精神的存在である。「こゝろ」までの作品においては、作中人物である男性によって見られる客体として女性が登場することが多い。「行人」の一郎は、メレジスの「自分は女の容貌に満足する人を見ると羨ましい。女の肉に満足する人を見て羨ましい。自分はどうあっても女の霊というか魂というか、所謂スピリットを攫まなければ満足が出来ない。」という言葉を用いながら、「おれが霊も魂も所謂スピリットも攫まない女と結婚している事だけは儲だ」と言って、苦悶の表情を浮かべるのである。「こゝろ」の「先生」は遺書にこんなことを記している。

私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛を有っていたのです。（中略）私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じているのです。（中略）もし愛という不可思議なものに両端があつて、その高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性慾が働いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕まえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ない身体でした。けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭を帯びていませんでした。

一郎や「先生」の女性観、恋愛観はそれ自体としては正当なものである。

このような男性の客体となる女性は、いきおい精神的存在として立ち現われるのである。漱石文学の女性たちが魅力的な所以はここにある

と思う。男性たちの精神的な眼差しが女性を美しくしているのである。

しかし、〈見る——見られる〉関係を結んでしまうとき、見られる側は〈謎〉の存在とならざるを得ない。存在それ自体としては自然存在であっても、見ることによって〈謎〉にしてしまうのだ。「三四郎」の三四郎、「彼岸過迄」の須永、「行人」の一郎、「こゝろ」の「先生」は、己れの心が作り上げた〈謎〉に苦悩しているに過ぎないのである。美彌子、千代子、お直、お嬢さんといった魅力的な女性たちを、彼らの眼差しが曇らせてしまうのである。

見ることを止めて、共生関係を結ぼうとするとき、女性はその自ずからな姿を現わすのである。「それから」の三千代、「門」の御米、「それから」の後日譚である「門」は、罪のうえに咲いた愛情生活を描いた作品である。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食を済まして、夜は近所の縁日へ御米と一所に出掛けた。そうして手頃な花物を二鉢買って、夫婦して一つずつ持って帰って来た。夜露に中てた方が可かろうと云うので、崖下の雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。

まさに「牧歌」（江藤淳）的な夫婦生活であるが、やはり暗い。微笑を絶やさない御米は健気であるが、白いフリージアというところか。

私の好きな黄色のフリージアは三千代である。三千代は台詞が魅力的な女性である。「堪忍して頂戴」、「淋しくっていけないから、また来て頂戴」。御米同様、基本的には〈耐える女〉であるが、三千代は、御米の持たない詩と能動性とを持った女性である。代助の求愛に、「しよがない。覚悟をきめましょう」と応じ、手を顔に当てて泣く三千代。

よんでみませんか



沖津圭子 (保育学)

* 「風の旅 四季抄」 星野富弘著

立風書房 1983 911.56/H92

授業に関係の深い図書や印刷物を読むことで時を費やし、他の本を手にするには殆んどありません。と言うのが正直なところですが、

このような生活を送っていますが、ふと見る本は「風の旅」です。頂いた時は、悲しい感情を覚えました。ページが進むうちにさわやかな美しさにぐんぐん吸い込まれてしまいました。心忙しい時、疲れた時、美しい静かな空間へ誘い、心新たに出発させられる本として棚に「風の旅」があります。

* 「アータンブーデタヨ」 0歳児から3歳児

まで丈夫に育てる会篇 ゴールデン
アート出版部 1985 493.9/Z3

子ども達を相手に将来生活をしようと志している私達は机上で文字や講義を通して子どもを理解しようと努めていますがどうしても平均化された内容となってしまいます。就職してから改めて、平均化されない部分や親と子の関係の無知に気付かされ悩みます。学生時代はこの部分を知ることは容易ではありません。「アータンブーデタヨ」は数量として表わせない親子の間を日々の生活から感知させる暖かく奥深い味わいがある若いお母さんの綴った育児体験記録集です。

小林淑枝 (給食管理)

* 「混迷のなかの飽食 食糧・栄養の変遷と

これから」 大磯敏雄著 医歯薬出版
1984 611/069

初版は既に10年も前に出されたものですが、今なお版を重ねております。著者は京都大学医

学部出身の医学博士であり、1935年26歳で栄養研究所に入って以来、1974年に退官されるまで一貫して日本人の栄養と食糧を確保することに献身されました。現在も食糧・栄養調査会会長として、やがてくる日本国民の食糧難と飢餓に備えた国民の自覚が必要であると警鐘を鳴らしておられます。私たちは現在の日本の飽食など虚構にすぎないのかも知れないと、ちょっと立ち止って見なくてよいでしょうか。

「素晴らしい人生のための栄養・健康法

Q & A」 Annette B. Matow, Ph.D., R.D. (アネットB.ナトウ), Jo-Ann Heslin, M.A., R.D. (ジョアン・ヘスリン) 共著。訳者は山口迪夫(国立健康栄養研究所食品科学部長)および中村丁次(聖マリアンナ大学栄養部栄養室主査)同文書院、1986 年であります。原著者は栄養士であると同時に医師でもあって、Q & A方式であなたが最も知りたい栄養・健康のことを、すぐわかる話しことばで説明してくれます。

* 「世界栄養文化大全」全10巻

(社)日本栄養士会法人化30周年記念出版
東京書房社 1988 498.5/Se22/1-11

栄養士業務は今日の社会情勢から高度化、専門化、合理化を迫られ激動しています。さらに加速度的に進行する国際化の潮流の中で、それらに対応してゆくために必要な内外の栄養士の業務情報を収集したものです。アメリカ編、イギリス編、オランダ編、カナダ編、中国編、西ドイツ編、日本編、フィリピン・韓国編、フィンランド編、フランス編に分けられ、紹介の方法もカラー写真入りインタビュー形式で理解しやすいものとなっています。諸外国の栄養士の真摯な養成と活躍ぶりがよくうかがい知れます。日本はきっと近い将来、アメリカタイプに変わってゆくことでしょう。


Angela Frieseke

フリゼケ・アンゲラ (英文学)

The book I want to introduce (Joanna Russ. *How to Suppress Women's Writing*. London: The Women's Press, 1984, £3.50) has 139 pages of text, starting with a forbidding satirical prologue. It contains 11 chapters, each dealing with a different kind of stratagem to suppress women's writing, looking at their backgrounds, possible psychological explanations, and giving lots of concrete examples -- the book is full of quotations from very diverse sources. Even for a person who thinks she/he is aware of the difficulties women face if they want to be writers, artists, this book is an eye-opener. For besides the easily recognizable forms of suppression there are each time the more subtle ones, of which those perpetrating them sometimes may not even be aware. The major categories dealt with are summarized on the outside cover of the book: *She didn't write it. But if it's clear she did the deed... -- She wrote it, but she shouldn't have. It's political, sexual, masculine, feminist. -- She wrote it, but look what she wrote about. The bedroom, the kitchen, her family. Other women! -- She wrote it, but she wrote only one of it. "Jane Eyre. Poor dear, that's all she ever..." -- She wrote it, but she isn't really an artist, and it isn't really art. It's a thriller, a romance, a children's book. It's sci fi! -- She wrote it, but she had help. Robert Browning. Branwell Brontë. Her own "masculine side." -- She wrote it, but she's an anomaly. Woolf. With Leonard's help... -- She wrote it BUT...*

The result is that, among other things, many women's books are simply not physically available for re-evaluation, that women lack models to define themselves and their art and are liable to believe about themselves a lot of what they find in men's writings. Russ's book shows that the reality of women's literature is -- in spite of all this -- impressive.

(J. Russ is an award-winning novelist and professor of English at the University of Washington, Seattle.)

*印は、図書館にある本です。ない本は注文していますので、もうしばらくお待ちください。図書館では、で囲んだ記号順で本を並べています。本棚で捜してみてください。



藪 禎子 (国文学)

「面影びとは法然 式子内親王伝」

石丸晶子著 朝日新聞社 1989.12

式子内親王あてに出された法然の書簡があったことすら、私は知らなかった。法然の消息文の中に聖如房という女性あてのものがあつた。この女性についてはずっと不明のまま、きていたのだが、それが実は式子内親王だったのだという。式子内親王なら、出家名「承如法」のはずだが、法然の消息文が筆写されて行く過程で誤記されたいことが、知恩院の僧等によって明らかにされていた(昭和30年)という。

その後30余年、このことが式子の文学との関係で殊更に重視されたことはなかったようである。馬場あき子氏の『式子内親王』(紀伊國屋新書 昭44、講談社文庫 昭54)などでも、「法然の専修念仏に式子が心を寄せていたことも興味深い」と記している程度である。

式子の人生と文学に法然が深く係わり、それが式子の歌の基底にあることを、石丸さんは確信をもって追っていたらしい。鮮度と自信に満ちた、おそらくは会心の書き下ろし評伝である。

式子内親王は『新古今和歌集』を代表する女流歌人で、特に「忍ぶ恋」の多くの名歌で知られている。

玉の緒よ絶えねば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

など、百人一首でとりわけ有名である。これだけの歌が具体的な思慕の対象なしに成立するとは考えられない。藤原定家であったかもしれぬなどの詮議は早くからあつたが、石丸さんは法然こそその人であったという。奇をてらった趣は全くない。筆致は、あくまでも謙虚である。ひたむきで美しい。法然の消息文を始め、作品一つ一つの読みが優しく丁寧で、心情のドラマを興味深く浮かび上がらせている。

問題はなお残ろうが、新しい照射として十分魅力的であると思われる。『朝日新聞』3月15日

付け夕刊に、石丸さんが「再説・法然と式子内親王」と題して紹介している讃岐國生口島光明房の二人の石塔と寺伝は、読者の想像力を更にふくらませてくれるものになっている。



各科の先生に本を紹介していただきました。お忙しいところありがとうございました。

試験が終わると待ちに待った夏休み。まぶしい太陽の光にちょっと疲れたら、以前から読みたかった本、今学んでいることに関係のある本ない本、今回紹介のあつた本、etc.

ヨンデミマセンカ☆

リクエストお待ちしております!

読みたいと思った本が図書館にない時、諦めてはいませんか。図書館では皆さんのご要望に出来るだけお応えしたいと「購入希望図書申込書」を用意しています。

昨年度は申し込み件数211件、その内172件購入しました。予算その他で購入出来ない本も他の図書館から借りることが出来ます。職員は資料提供に命を賭けています。諦めずに是非カウンターまで。

昨年度購入希望で入った本

『人麻呂の暗号』 藤村由加著
『イマジン: ジョン・レノン』

おの
一部

アンドリュー・ソルト他編著
『恐竜の百科』 デビッド・ランバート編
『TUGUMI つぐみ』 吉本ばなな著
『赤毛のアン・夢紀行』 NHK取材班他著
『社会主義よどこへ行く』

『朝まで生テレビ!』 田原総一郎司会
『陰陽五行思想からみた日本の祭』

吉野裕子著
『世紀末研究』世紀末の会編 (雑誌)

卒論雑感

濱崎 睦（国文助手）

時が経つのは早いもので、「卒論、卒論」と騒いでいたのが、もう半年も前のことになってしまった。あのバ切り間際の切迫した日々が、今では夢か何かのように感じられる。

ところで、卒論とは一体何であろう。当然、それは卒業するために必然的に書かねばならないものであり、最終的にモノとして存在しないことには話にならない。けれども、私にはそうしたモノとしての卒論よりも、卒論に関っている約一年余りの時間そのものこそが、より貴重な卒論であるように思われてならない。

私の場合、何を研究対象にするのかということとは、かなり早い時期から絞られていたのだが、それをどういう方向に向けて展開してゆくかという、一番肝心なところが、恥かしいことに、本当にぎりぎりの時期まで決められていなかった。というよりも、私にはっきりと見えてこなかった。焦れば焦る程、テーマを無理に規定すればする程、興味や関心が微妙にずれてしまうのだ。

もし、早い時期に方向性までもが見通せていたなら、と思う。研究しようとする作家や作品についての詳しい論文に目を通す時も、自分のテーマさえはっきりしていれば、そこにポイントを絞ってみてゆけばよいわけで、事はかなり手際よく進んでいたはずである。ところが、実はこここのところが死角で、そうした枠組みを規定した中でのみ展開される研究では、決して外部は見えてこない。切り落したものを考慮しないことを前提としたところに成立する。見方の偏った論究に陥ってしまう可能性が大きいであろう。それとは逆に、私のようにテーマが見えないがゆえに、あれこれ手を伸ばして、試行錯誤を繰り返しながら進んでゆくやり方は、限ら

れた時間の中ではひどく能率が悪い上に、精神衛生上もあまりよいとは言えないが、思わぬところでいろいろな拾い物をする。随分と結果的に卒論に直接関係のない本を読むことにもなったけれど、ある意味でそれは認識の幅を広げてくれ、そのおかげで、私は自分の視点を外へ外へと繰り出すことができたように思う。

私は去年の春、卒論に本格的にとりかかろうという時に一冊のノートを用意した。「卒業論文作成ノート」などと立派な名前がつけられてはいるが、実は「卒論日記」ともいべきもので、卒論に関するものの他、就職活動のことやサークルのこと、会った友人の名前などが、簡単に記されている。が、そうした一見無関係と思われる日常のことが、不思議と卒論と引き合っていることが分かり、今読み返してみると案外おもしろいのだ。とすれば、卒論は何も机に向かっている時のみ生成されるものではない。関係のない本を読むことや、卒論を気にかけている自分の目が、日常の中に何ものかを見出すことによっても形成されてゆくのだといえよう。

それはおそらく、私達が一生のうちに何度経験できるかできないかの特殊な時間であろう。そして、だからこそ、そんな卒論という時間を、楽をしないで過してほしいと思うのだ。



元気にしています

佐藤和子

えんどうの芽が出て10cm位。ホーレン草・かぶは双葉のまま。大根も春菊も芽はでたばかりもっぱら青物は自然に家の周囲に生え出てくる三ッ葉か蓀、アスパラも草の間から10本位は収穫しました。夏ごろまでポツポツと贅沢ができるはずですが、でも昨日玄関のチャイムで出てみると手籠にいっぱい摘みとったばかりのアスパラを入れてニコニコ顔の農家の小母さん、さっとゆがいてたべるおいしさは手入れの相違歴然です。牛ふんとか鶏ふんを入れてやらないとだめですよ、今から来年のためにですよ、と頼りない同業者に教えていきました。

今、私の世界は黄色のタンポポで輝いています。プラムの木の下でタンポポはご近所の迷惑もかえりみずそっとしています。時々葉っぱをちぎってきて特製サラダにしのぼせるために。

13年間毎日かよった図書館、今こうしてちょっと時間と距離をおいて振り返ってみて、懐かしいというのではない、なんとというか私には帰る事の出来る所があるという実感、安心感というのでしょうか、もう退職して私の場所はないはずなのに、私の……そう、私の、なのです。

新着図書をばらばらめくるときめき、その後でゆっくり読みましょう。オヤこれは昨日探し

ていた学生に教えましょう。今日もくるかな？とかまた書庫の薄暗い棚にまぎれていた不明資料、かくれんぼのオニさながらの見つけた時のホッとした喜び。

一冊の本を読んでいるとあれもこれもと関連して読みたくなるのを時間がないからあとでとおさえおさえして本の背ばかり見ていたような13年ではなかったかと……反省しきりです。でも今、時間は一日中と思いきや当てがはずれ、一日の時間が短くなったのではと疑うばかりです。「魔女がいっぱい」「まぼろしの小さい犬」「ジョコング婦人の肖像」こんな小さい子向けの本を子供になって読んでしまっ、まだお掃除もしていない罪悪感にとられる普通の小母さんになりつつあります。時間に自由になったはずなのにまだ女性の業？性？のなせる自らの束縛なのでしょうか。さりげなく身のゴミを掃きだす勇気が欲しいものです。

高田敏子さんの最後のエッセイ「娘におくる言葉」を読んでいます。彼女のちゃんと生きた確かさの根源……

私もいつか「死ぬ日」のために……

五月晴れの日に



似顔絵カット・小杉ゆう子

(旧図書館職員・貸出カウンター)

1990. 3 退職

新入職員紹介

安瀬 可奈子

昨年3月末に、母校の図書館でアルバイトをしませんかという有難いお話を頂きました。丁度、土が雪と雪の間から顔をみせ、底冷えする様な風から、春らしい風へと変わる頃でしたので、私の心の中でも、季節の変わり目のように、何かが私自身を変えてくれる様な気がしました。

「人生、意気に感ず」とは、こういうことを言うのかなと思わせてくれたのは、この図書館を紹介して下さった先生、そして、この図書館にお勤めの方々に会ってからの様な気がします。学生時代の私は、何に対しても、皮膚の見であったような気がしますし、当然、図書館は本を管理すべきところなのだと、ただそれしか思っていなかったようにおもいます。一冊の本が、どの様にして受け入れられ、どの様にしてカード作成がなされているかなど、考えたこともありませんでしたが、最近では、自分の本を大切にしているだろうかと考え、帰宅した後、ふと自分の部屋の本棚に目をやるようになってしまったくらいです。

お堅い小説でも、絵本でも、お料理の本でも何でもいいけれど、本を読まない人など、どこを探しまわってもいないと思います。どの様な本でも、ちょっとした一文やひと言が、人の人生を大きく変えたり、そこから何か得るものがある様に思えます。

私は、本学の図書館が、多いにそうであれば良いと思いますし、そうあり続けてほしいと願っております。又、私も、何かを得られるような本と何度でも出会っていきたくと思います。

お知らせ

★小笠原克先生が4月1日付で館長に再任されました。

★昨年3月に大学英文学科、短大英文科を卒業された皆さんから、ビデオ一式が寄贈され、書庫2層に置かれています。VHSとβ(β-9)のどちらのテープも使えます。図書館所蔵のテープはまだ少ないですが、ご利用の方はお気軽に貸出カウンターに申し出て下さい。

★夏季休暇中の開館、休館等は下記のとおりです。詳しくは掲示板をご覧ください。

<開館> 7月30日(月)～8月2日(木)

8月4日(土)

8月20日(月)～9月14日(金)

開館時間 月～金 9:30～16:00

土 9:30～14:00

<臨時休館> 8月3日(金)

<休館> 8月6日(月)～8月18日(土)

藤女子大学 図書館だより 第37号 1990.7.10
藤女子短期大学

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館

TEL 011-736-0311(代) FAX 011-709-8541(大学庶務課)